

# アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛

## —第8巻で論じられる信仰と真理の形而上学的対比—

九里 秀一郎<sup>※</sup>

### 要約

本研究はアウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点を考察する一連の研究の一つである。彼の『三位一体論』テキスト<sup>1</sup>は全15巻から成り、本研究は第8巻以降の後半部分を論じている。彼はその部分で、「愛する人、愛されるもの、愛」という関係にもとづく独特の三位一体論を展開している。長い議論の末に、彼は“記憶、知解、意志”から成る三位一体が、神の三位一体の最適な類比であることを確信した。本研究では社会福祉に不可欠な隣人愛を三位一体論に基づいて理解することに大きな関心を持っている。その実現のためには、隣人愛に関する議論を最初から確認する必要があると考えている。本稿では第8巻の序章から第3章までの論理を、全文デジタルデータを用いて正確に把握した。三位一体論と私たちの世界の真理について、それぞれの本質と実体の形而上学的<sup>2</sup>な対比がなされる。真理と偉大、心の実体は神の本質と異なるが、善の本質が一致することが論じられる。彼は自身の回心の経験を善に向かう心の働きとして理解する。今回、形而上学的な議論を詳細に検討した結果、善の中で生き、動き、存在するという人間理解が隣人愛につながる重要な課題であることを見出した。

キーワード アウグスティヌス 三位一体論 隣人愛 第8巻

### 目次

1. 序論
2. 方法
3. 結果
4. 考察
  - 序章 信仰の真理。
    - (1) ニカイア・コンスタンティノポリス信条
    - (2) 信仰の真理
  - 第1章 真実と偉大さ。
    - (1) 真実と偉大さは信仰の真理と異なる。
    - (2) 類比と隠喩による理解
  - 第2章 人間の心の物的性質。
    - (1) 真理を遮る心の物的な似姿
    - (2) 科学的知識が真理を見えにくくする。
  - 第3章 善の中に生き、動き、存在する人間。
    - (1) 魂の善と回心
    - (2) 私たちはこの善の中に生き、動き、存在する。
5. 結論
- 凡例
- 引用文献・注
- 参考文献
- 図表

## 1. 序論

アウグスティヌスの『三位一体論』は全15巻から成り、第8巻を境に、前半と後半に大きく分けられる。前半は伝統的な教理の解釈が中心であり、後半はアウグスティヌス独自の特色ある議論である。本研究はこれまで最終第15巻を中心に考察してきた<sup>3</sup>。人間の精神には記憶と知解と意志による三一性があり、それが言葉と愛に深く関係し、神の三位一体の似姿であるという内容であった。

私たちは社会福祉に不可欠な隣人愛を三位一体論に基づいて理解することに大きな関心を持っている。その実現のためには、隣人愛に関する議論を最初から確認する必要があると考えている。第8巻は三位一体論後半の序論であり、第7巻までとは異なる探求方法を模索する。第8巻の前半では、三位一体の信仰の真理を確認し、真理、偉大、物体、心、善と対比した考察がなされる。後半では、義について、愛について論じられる。その結果、愛の三一性「愛する人 愛されるもの 愛」を精神に求める新たな探求方針に達する。本稿は第8巻の序章から第3章まで、隣人愛に関する関心を背景として、三位一体論と私たちの世界の真理に関する本質と実体の形而上学的な対比を確認する。

教皇ベネディクト十六世の最初の回勅『神は愛』に次の言葉がある<sup>4</sup>。「聖アウグスティヌスはこう述べています。『あなたが愛を見るならば、あなたは三位一体を見るのである。』」教皇が教会の隣人愛の実践について語る冒頭の言葉として、第8巻12節の言葉が引用されている。しかし残念ながら、アウグスティヌスの三位一体論では、隣人愛を愛の掟として掲げるが、隣人愛そのものを論じてはいない。

国内では、三位一体論に関する文献はいろいろあるが、隣人愛を中心としたものは見当たらない。三位一体論の後半について金子晴勇は「神論というよりも神との関係にある人間存在論が試みられている。」と語り、人間学という観点で捉えている<sup>5</sup>。谷隆一郎は「まさに前人未到の探求と呼ぶべきもので、今日なお汲み尽くしがたい豊かさと深さを湛えている」と語り<sup>6</sup>、三位一体論に沿った理解を行っている。第8巻については「他者への愛というものがいかに至難であるかを示している。」と言う<sup>7</sup>。出村和彦は、「彼ほどこの愛の掟をさまざまな面において考察していった者はいないであろう。」と語る<sup>8</sup>。このように、三位一体論をもとにした議論は実に多様である。確かにアウグスティヌスは出村の言うように隣人愛については、掟という倫理的な形でしばしば語っている。『キリスト教の教え』の中には、「人が神と隣人に対する二つの愛を建てるところまでいかないとしたら、まだ聖書を理解したとは言えない。」と語る<sup>9</sup>。もし、隣人愛が実現困難な掟のひとつであるならば、キリスト教の隣人愛はいったいどこにあるのだろうか。神を愛するのが困難のように、隣人を愛することも、互いに愛し合うことも、汝の敵を愛することも実際は不可能と言うのだろうか。

アウグスティヌスは信仰と理性を人生のテーマとし、後世に膨大な知的財産を残した。信仰はキリスト教の基盤となり、理性は多くの西洋科学の源流となった<sup>10</sup>。しかし、20世紀以降のめざましい科学の発達、世界規模の深刻な問題を私たちに投げかけており、その問題

の根底には信仰と理性の分断があると言われている<sup>11</sup>。この克服のために、信仰と理性について最初で最大と言われるアウグスティヌスの知恵に期待している。

## 2. 方法

本論では、序章にある信仰の規則から最終章の愛の三一性に至る議論の流れに特に関心を持っていて、そのために、できるだけ思考過程を忠実に辿りたいと考え、論文の基本単位である節を構成している段落ごとに論旨を確認した。三位一体論は極めて論理的に表現された文章が多く、特に本論で使用した日本語訳テキストは直訳に近く読みにくい。しかし、今回の目的には適しているため、できるだけ日本語訳の表現をそのまま使うことにした。

作業は第8巻全文のデジタルデータを用いて行った<sup>12</sup>。最初に、使用されている単語の使用頻度を段落ごとに機械的に算出した（表1）。次に、本文を画面表示して、使用頻度の多い熟語を参考に主文を把握した。通常は段落の第1文が主文となっており、その主文の主旨を補うために必要な部分を最低限本文から抽出した。ただし、繰り返しの表現は絞り、二重否定などの複雑な表現は単純化し、文脈を整えるための短文を若干挿入した。文に込められた微妙なニュアンスは表現されていないが、客観的な論理を把握することを優先した。さらに、段落の前後、章の前後の関係を確認して、話が飛躍することなく思考過程が明瞭に読み取れるように表現を工夫した。

第8巻は、序章に続いて第1～10章、節は1～12節で構成されている。全段落に見出しを付け全体の構成を検討した（表2）。その結果、第8巻は段階的な議論の積み重ねとなっているので、分割して論ずることが可能であることが判明した。本稿では序章～第3章を対象に、段落の論旨を結果にまとめ、章ごとに考察を行う。対象部分の議論を概観するため、第8巻構成（表2）から該当部分を抜粋して以下に示す。

序章～第3章の見出し

章	見出し	節	段	小見出し
序	信仰の真理。	1	1	相互関係的な実体と偉大な本質。
			2	偉大な本質とペルソナの神性の等しさ。
			3	信仰の真理に関する論議の限界。
1	真実と偉大さ。	2	1	創られた真理と造られたものの真理。
			2	より真実なものがより大きい。
			3	真実が等しければ等しく偉大。
2	人間の心の物的性質。	3	1	心は物体と同じように真理と異なる。
			2	神が何でないかは価値のある知識。
			3	心が見る真理の光を遮る物的な似姿。
3	善の中に生き、動き、存在する人間。	4	1	すべての善の善である神。
			2	魂の善。
			3	意志を働かせ善き心となる回心。
		5	1	分有された善そのものを観ること。
			2	善の中に生き、動き、存在する人間。

注：第8巻構成（表2）抜粋

### 3. 結果

#### 序章 信仰の真理。

##### 序:1:1 相互関係的な実体と偉大な本質。

神の三位一体において、父と子そしてこの両者の賜物である聖霊のように相互関係的に言い表わされるものは、個々のペルソナに、固有の意味で、かつ区別されて、属していると言われる。ところが、個々のペルソナが各自に対して語られるとき、父なる神、子なる神、聖霊なる神、しかも、そこで三つの神と言われるのではなく、一つの神、三位一体御自身と言われる。それは神の場合、存在することが直ちに偉大であるゆえ、これらは本質によって言われるからである。

##### 序:1:2 偉大な本質とペルソナの神性の等しさ。

したがって、三つのペルソナあるいは三つの実体と言われるのは、或る一つの語で答えられ得るようにである。神の三位一体においては、父が神性に関しては、子よりも大きくないだけではなく、父と子も共に聖霊よりも大きくないというほどに等しさがあり、また三つのペルソナのいずれのペルソナも三位一体御自身よりも小さくないのである。

##### 序:1:3 信仰の真理に関する論議の限界。

以上のような信仰の真理が語られたのである。さらに論じられるなら親しく知られる。しかし、この論議には限界が置かれるべきであり、私たちの知解の眼をひらき、真理の本質が精神によって観られ得るために、神に懇願しなければならない。今までの方法よりも内的な方法で精神の力を傾注しよう。勿論、私たちの知解の眼にまだ明らかにされなかったことは信仰から解き去らしめるべきではない。

#### 第1章 真実と偉大さ。

##### 1:2:1 創られた真理と造られたものの真理。

三位一体において、二つあるいは三つのペルソナは、一つだけのペルソナよりも大きいのではないと語る。そのような思惟は造られたものの真理を、出来る限り知るのであるが、それらを創られた真理御自身を観ることは出来ないからである。あの物体的な光〔太陽の光〕でさえ、明白ではない。

##### 1:2:2 より真実なものがより大きい。

真理の実体においては、真理のみが真に存在するゆえに、より真実に存在するものこそ一層大きいのである。叡智的で変ることのないものはすべて、等しく変化しないで永遠であるから、或るものが他のものに較べてより真実であるということはない。それゆえ、偉大さが真理そのものであるところでは、より多くの偉大さを所有することは、必然的により多く真理を所有する。より多く真理を所有するものはより真実である。したがって、より真実なものはまたより偉大でもある。

### 1:2:3 真実が等しければ等しく偉大。

父と子の共在は、父のみ、あるいは子の場合よりも真実なのではない。したがって、父と子の共在は父と子のうちの単独のものよりも大きくない。三位一体御自身も、その個々のペルソナと同じほどの大きさである。真理そのものが偉大であるところではより真実でないものはより大きくない。真理の本質においては存在することは真実であることであり、偉大であることは存在することであるゆえに、真実であることは偉大であることである。したがって、等しく真実であることはまた等しく偉大でなければならない。

## 第2章 人間の心の物的性質。

### 2:3:1 心は物体と同じように真理と異なる。

この金とあの金は等しくて真実であるが、これはあれよりも大きいということがあり得る。それは物体の場合には、大きくあることと真実であることが同じくないし、また金であることと大きくあることとは別であるからである。このようなことはまた心の本性においても言われる。心が大きいと言われるのと心が真実であると言われるのは同じことではない。大きな心でない人も真実な心を持つからである。すなわち、物体と心の本質は三位一体のような真理御自身の本質ではない。三位一体なる神を、場所の空間をとおして接合され、包まれている、いわば三つの物体のようないかなるものをも考えてはならない。また霊的なものにおいて私たちの念頭に浮ぶすべての可變的なものを神と思惟ってはならない。

### 2:3:2 神が何でないかは価値のある知識。

神とは何かを知り得る前に、神が何でないかをすでに知り得るなら、それは無価値な知識ではない。神は確かに大地でも天体でもなく、また天と地を一つにしたようなものでもなく、天において見るような或るものでもない。太陽の光を何千倍または測り得ないほど増加させたとしても、それは神ではない。また千の幾千倍の天使がすべて一つのものに整序されて一つと成ったとしても、神はこのようなものではない君が身体のない霊について思惟したとしても、それは神ではない。

### 2:3:3 心が見る真理の光を遮る物的な似姿。

出来るなら視よ。神は真理にましますことを。「神は光である」から。その光は私たちの眼が見るような光ではなく、神は真理にまします、と君が聞くと、心が見るような光である。真理とは何か、と問い求めてはならない。というのは、そのとき直ちに物的な似像の雲霧と虚妄の雲が君を遮るからである。真理、と語られるとき、その最初の瞬間に、出来るなら留まれ。しかし君は留まり得ない。君は再びあの習慣的な地的な表象の中へ滑り落ちるであろう。君が再び滑り落ちるのは、情欲の癪や異郷への巡礼の誤謬によって感染された汚辱でないなら、いかなる重さによるのであろうか。



### 第3章 善の中に生き、動き、存在する人間。

#### 3:4:1 すべての善の善である神。

見よ、出来るなら、再び視よ。君はたしかに善きものでなければ愛さない。高い山、なだらかな丘、広々とした平野をもつ大地は善い。精気に満ちた身体を持つ動物は善い。温暖で健康に適した空気は善い。苦痛や疲労のない健やかな状態は善い。甘やかな一致と信実な愛をもつ友の心は善い。正しい人は善い。富は困窮から脱するのに役立つから善い。これは善い、あれは善い。これも取れ、あれも取れ、そしてもし出来るなら、善そのものを見よ。そのとき、君は或る他の善によって善であるのではなく、すべての善の善である神を見るであろう。

#### 3:4:2 魂の善。

もし私たちに善そのものの観念が刻印されていないなら、或るものを他のものよりも善いと言わないであろう。かくて、この善あの善ではなく、善そのものである神を愛さなければならぬ。私たちが問い求めなければならぬのは魂の善であって、愛することによって固着すべきものである。この善は神でないとするなら、一体何であろうか。神は善き心でもなく、善き天使でもなく、また善き天体でもなく、まさに善なる善きお方にいます。

#### 3:4:3 意志を働かせ善き心となる回心。

善き心、そこに二つの言葉があるように、一つは心であり、他はその心が善であることである。心は心であるために自分自身では何もなさなかった。なぜなら、心は決して自分を存在させるものではなかったから。だが思うに、善き心であるためには、自分の意志を働かせなければならない。心であることそれ自体が善きものではないというのではない。そうでなければ、どうして心は身体より優れているのだ、と言われるであろうか。心が熱心に意志を働かせ、そして善き心となるなら、それは心が自分でない或るものに向って回心することによってのみ可能である。心がその善から再び離反し、善から背離するというこのことによって善き心でなくなるときも、もし心がそこから背離するあの善が心の中になお留まっていないうなら、心が善くなろうと欲しても、再び回心する道が存在しないことになる。

#### 3:5:1 分有された善そのものを観ること。

もし変らざる善が存在しないなら、いかなる移ろいやすい善も存在しないであろう。だから、これらのものがそれを分有することによって善である善そのものを観ることが出来るなら、そのとき、君は神を観るであろう。そしてもし君が愛によって神に寄り縋るなら、直ちに浄福にされるであろう。

#### 3:5:2 善の中に生き、動き、存在する人間

しかし、善そのものを愛さないなら恥すべきことである。心も、それが変らざる善へ回心することによってまだ善ではないときも心であるゆえにのみ心である。心はそれが造られるべきであったと見られる処でこそ、造られたものとして是認されるから。ここに真理があり、純一な善がある。それは善そのものに他ならず、それゆえにこそ、最高善でもある。心は最高の善から離反するとき善き心でなくなる。しかし、そのときも心は心でなくなるのではな

い。心は心であることで身体よりも優れている善であるから。心はその存在の根拠に向って在り方を廻らそうと意志するために、すでに存在していたから。私たちはその善において、存在すべきでなかったなら、存在し得なかったことを見る。だから、この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する（使徒17:27, 28）からである。

#### 4. 考察

第8巻序章から第3章は、三位一体を理解する一連の論理の第1段階である。一つの本質と三つのペルソナ（実体）に関する信仰の真理を、私たちの知っている形而上学的な実体と対比するのである<sup>13</sup>。ペルソナと対比する第1章以下の形而上学的な対象を、関連する聖句と合わせて以下にまとめる。

ペルソナと対比する形而上学的な実体

	本質	実体	関連聖句
序章	神	ペルソナ	父、子、聖霊
第1章	真理	真実	真理の神（エレ10:10）
	偉大	偉大さ	神は偉大（ヨブ36:26）
第2章	物体	種類・大きさ	万物の創造者（エレ10:16）
	心	真実・大きさ	新しい心を与え（エゼ36:26）
第3章	善の善	善いもの・大きさ	見よ、それは極めて良かった。（創1:31）

第1、2章において形而上学的な実体と信仰の真理との違いが浮き彫りになり、三位一体の神秘がより鮮明になる。アウグスティヌスは33歳で受洗する少し前に、すべてが善であるという思想によって神と善の深いつながり確信し、悪の実体が存在しないことを悟った<sup>14</sup>。彼の回心の経験も神の善をいっそう確信させることになった。このような経験に根差した思想的背景があるので、第3章が議論の中心であり、第1、2章は準備的な議論であるとも考えられる。続く第4章の冒頭には、「善の現臨を享受するためには、愛によってこの善のもとに立ち留まり、この善に固着しなければならない。」とあり、善から第4章以下の愛の議論へ円滑に推移する（表2）。

以下は、各章ごとに論理の確認を行い、隣人愛とのつながりを模索するための考察である。

#### 序章 信仰の真理。

##### （1）ニカイア・コンスタンティノポリス信条

序章で信仰の真理と言われるものは、第1コンスタンティノポリス公会議（381年）で制定された三位一体に関する信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）と基本的に同じ内容で、アウグスティヌスが27歳の時に制定されたものである。聖霊に関する表現に若干の

違いがあるものの、現在でもほとんどのキリスト教会がこの信条を採用している。ギリシャ語では三位一体を三つの実体一つの本質と言うが、ラテン語では実体と本質が同じ単語なので、ラテン語では三つのペルソナ一つの実体（本質）と言う。三位一体という用語は、一般社会でも一つの本質に実体が三つある場合に普通に使われる。日本語では、ペルソナに位格という訳語もあるが、本論ではペルソナまたは実体を用いる。

## （２）信仰の真理

アウグスティヌスが三位一体論で信条（ドグマ）という語を使わず「信仰の真理」と言うのは、信条を論じればキリスト教の権威を冒すことになるからであろう。「アウグスティヌスはドグマから自由な、ゆたかな文献学的、文学的な方法を採用し、種々の、多様で多層な解釈の道を探り、解釈は真理と相関する。」と言われる<sup>15</sup>。序章にある信仰の真理を記した文章は、神の偉大性とペルソナの相互関係性が二本の柱であることが明瞭に示されている。ペルソナの相互関係性とは、父と子の同質性、父と子からの賜物である聖霊の関係である。別の言い方をすれば、時間的な差がなく子は父から生まれ、時間的な差がなく聖霊は父と子から発出する信仰上の関係である<sup>16</sup>。

## 第1章 真実と偉大さ。

### （１）真実と偉大さは信仰の真理と異なる。

第1章から、信仰の真理と私たちの知る真理との対比が始まる。すでに述べたように、信仰の真理はもともと観えない神の世界であるが、言葉で表現された信仰の真理と私たちの世界の真理とは形而上学的な対比が可能である。最初に「真理」と「偉大」が対比される。これは神について聖書に書かれた言葉である。もちろん聖書は人間の言語で書かれているので、「神は人間の世界における真理のようなもの、偉大なものと似たもの」という意味である。アウグスティヌスは真理の実体を真実、偉大の実体を偉大さと表現した。「真実」は真理を所有するもの、「偉大さ」は偉大を所有するものという意味である。これらとペルソナを対比するとどうなるかが論点である。私たちの世界では、真実と偉大さは、状況によって増減する。より真実なもの、より偉大なものが存在する。ところが、ペルソナは最高の存在であり、三位一体の神自身も最高の存在である。存在そのものが真実であり偉大さの根拠であるところでは、最高の存在であるペルソナがいくつ集まっても、より真実に、より偉大になることは無く、常に最高の存在であることは変わらない。従って、私たちの世界における真実と偉大さは信仰の真理と異なるという論理である。

### （２）類比と隠喩による理解

第1章では、真理と偉大を選び、神の三位一体と対比する。第9巻以降には、精神の多様な機能について、このような対比がなされる。似ている面と同時に似ていない面が検討され、三位一体の神との類比あるいは隠喩を論ずる。隠喩は、似ている面だけでなく、似ていない面も明らかにしたものである。似ている面と似ていない面と合わせて、観えないものを一層明瞭にするのである。特に第15巻では、記憶と知解と意志の三一性を神の似姿の隠喩とする



極めて精緻な議論がなされる。

人間が未知のものを発見する時、特に自然科学ではこのような方法は一般的である。未知の現象を、似ている現象と比較して、その違いから新しい真実を発見するのである。アウグスティヌスが、人間には観えない信仰の真理を理解するために、まず私たちの知っている真理と偉大さを対象に選んで対比したことは、自然科学的な発見の手法に沿った発想である。筆者には、「偉大」という言葉になじみがない。神は偉大という表現も、聖書にはそれほど多くはない。一方、社会福祉では「人間の尊厳」という言葉がある。もし、これを真理とするならば、実体は何であろうか。ペルソナとどのような対比が可能であろうか。このような形而上学的な対比は、健常者と障害者の共生社会モデルの構築に役立つかもしれない。

## 第2章 人間の心の物的性質。

### (1) 真理を遮る心の物的な似姿

第2章は、アウグスティヌス独自の三位一体論の基本的なスキームが登場する重要な部分である。心が真理の光を見ようとしても物的な似姿でその光が遮られると言う。

第2章1段では、まったく性質の異なる物体と心を並行して論じるので戸惑う。物体を先に論ずるが、この段落以降の議論との関係からすれば、心を論ずるために物体を先に論じているのである。物体の真実、心の真実という表現があるので、どちらも形而上学的な存在である。物体の真実とは、物体の実体のことで、種類と大きさのことである。種類には、例えば金や石であり、大きさには大小がある。そうすると、種類と大小の組み合わせでさまざまな実体が存在する。それは最高の三つのペルソナの存在とは異なるという理解である。心の場合も同様である。心の実体の場合は、真実な心、大きな心と呼ばれるものである。小さな心でも真実な心があるので、心の実体も真実と大小の組み合わせでさまざまな形が存在する。それは最高の三つのペルソナの存在とは違う。以上のような対比がなされる。

第2章3段では、真理の光が心に照らされても、一瞬のうちに物的な似姿が心に浮かんでそれを遮ってしまうと語る。その遮るものは、「習慣的な地的な表象」あるいは「情欲の虜や異郷への巡礼の誤謬によって感染された汚辱」とある。これは、パウロが内在する罪の問題として「わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。」(ロマ7:23)と似た主旨である。第9巻以降、最後までこの点を繰り返し、そのような心であっても精神は神を見ることができると語る。これは、パウロの「今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」(ロマ8:1,2)と同じ理屈である。

以上のような三位一体論の基本的なスキームは隣人愛の視点から人間集団に拡張出来るものである。物体と同じような心をもつ人間という概念は、ある意味で、すべての人間と言えるからである。聖書に登場する人間集団はユダヤ人、サマリア人、ギリシャ人、異邦人などがある。これらは多様な人々の集団であるが、イエスの弟子たちなどは心をつにした集団で

ある。現代の社会福祉の分野では、障害者と分類される人々とそうでない人々が考えられる。このような人間集団について、形而上学的に真実と大小を真理と対比することは価値があると思われる。第9巻から第15巻で為されたアウグスティヌスの精神の三一性だけではなく、同様な論理を展開することによって、隣人との交わりにおける新しい三位一体論が生まれる可能性がある。

## (2) 科学的知識が真理を見えにくくする。

第2章では、心が真理の光を見ようとしても物的な似姿で遮られることを説明するために、物体や空間について当時の知見を書いている部分がある。もし同じ議論を今するならば、現代は物体に関する知識が膨大にあるので、議論ははなはだ複雑になる。科学的知識が信仰の真理を見えにくくすることについて以下に論ずる。

『三位一体論』テキストには、当時の自然観や魂に関する知見がいくつか記されている。第3巻には被造物に関する基本的な考えが記されている。「神は被造物の美しく秩序づけられた運動、まず霊的な運動、次に物的な運動をとおして、万物をとおしてご自身を偏在させる。逃亡者・罪人なる理性的な生命すら、敬虔で正しい生命の理性的な霊によって支配される。すなわち、神がすべての物的なもの、の形と運動の第一の最高の原因である。」(3:9) 第10巻では、「精神あるいは魂は、血であり、脳であり、心臓であると思う人々がいた。」「或る人々はいわゆる原子という極微、不可分割の小物体の集合、凝集から心が成り立っていると考えた。」(10:9) などがある。特に、アウグスティヌスは天文マニアであったことが、自叙伝『告白』に記されている<sup>17</sup>。実際に天文学の観測や計算をしていたことが書かれていて、マニ教の計算の仕方に関心があったとある。ところが、マニ教の話はまったくでたらめなことを知って失望し<sup>18</sup>、それが彼の信仰が目覚めていくきっかけとなった<sup>19</sup>。

第8巻では、当時の物質に対する知識をもとに物体の実体を種類と大小としているが、現代では物体の実体は当時と比較にならないほど明らかになっている。現在では自然界のほとんどすべての元素が発見され、各元素固有の性質もすべて確定している。物体の概念そのものも、古代では考えられない新しい自然像が確立している。物体は原子で構成され、原子は素粒子からできている。光や素粒子は粒子性と波動性の二重性がある。また、質量とエネルギーは等しく、人間が観測できる物体の大きさも不確定性原理によって限界がある。現代の物体に関する真実は実に膨大であり現代の科学技術を支えている。

現代でも物体の究極の姿が未知である以上、第8巻においてなされた物体の真実がペルソナと異なるという結論は変わらない。しかし、今そのことを第8巻の様に説明するならば、科学的知識が増大した分、膨大な手間がかかるのである。序論でも述べたように、あらゆる分野で生じた信仰の真理と科学の真理の不均衡が、さまざまな地球規模の深刻な問題の原因ではなからうか。科学の増大が信仰の真理を遠ざけるのである。信仰者であり科学者でもあったアウグスティヌスの思想は、この危機を克服する貴重な知恵ではなからうか。

### 第3章 善の中に生き、動き、存在する人間。

第3章では、善について、および、私たちと善の関係が論じられる。前章の議論とのつながりから最初に後者について、続いて前者について論ずる。

#### (1) 魂の善と回心

心について第2章、3章で論じられる。第2章では、物体と心について形而上学的な対比を行い、心の真実と大きさの違いは物体と同じように神の真理とは異なると言う。第3章では私たちの世界には様々な善があり、善の善が神である。私たちは様々な善を分有して、心は意志の働きによってより善いものになると言う。心は物的な面と、非物的な面の両面があると語るのである。

このような心の理解は、彼の自叙伝『告白』に詳しく記されているように、プラトンの学びと回心の体験に根差した彼の思想にもとづく<sup>20</sup>。若い頃から悪の存在に悩み、すべてが善という理解が回心の大きな原動力となった。アウグスティヌスは、心がもともと身体より優れていること、被造物をとおして神性を知ることができること、この二つの基本的な考え方を持っている<sup>21</sup>。第3章の議論は、このような彼の思想が背景となって、心は本来物的であるが必ずしもそうではない可能性を提起したものと考えられる。

第3章でなされる回心の分析は、第15巻で頂点に達する精神の三一性の萌芽を見ることが出来る(3:4:3)。回心は、「心」が普遍的な「魂の善」に向かって「意志」の働きで善くなると分析する。回心が精神の複数の機能の統一的な働きで起こるという理解である。重要なのは、心が善でない時も善を留める「心に留まる善」の存在が神との関係で示唆されている点である。これが第15巻で精神を神の似姿とすることに繋がるのであろう。

以上の議論は、精神の三一性の原型であると同時に、私たちにもより開かれた発想を促す。人が回心することは日常的にあり、回心と隣人愛は深く関係しそうである。隣人愛の中に、人が他者の回心を望むこともありそうである。第15巻で論じられる精緻な精神の三一性と比べ、回心の三一性は私たちにずっと身近であり、今後、隣人愛との関係で考察すべき重要な課題の一つと考えられる。

#### (2) 私たちはこの善の中に生き、動き、存在する。

第3章最後にある次の聖書の言葉は、神と善の優れた体系的理解と考えられる。「だから、この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する。」(使17:27,28)。もともとの聖句では「神」であった部分を「善」に変更して引用していることから<sup>22</sup>、「私たちが神の中に存在することは、善の中に存在すること。」という主張に等しい。この思想は、既に述べたように、アウグスティヌスが回心に至るまでのさまざまな心の葛藤から生まれたものであり、自身の体験が善の神学的体系へと飛躍するようである。

スウェーデンの神学者アンデルス・ニグレンは彼の善の思想について、アウグスティヌスの『告白』の根本思想の中で次のように興味深く語っている<sup>23</sup>。

アウグスティヌスによると、神は絶対的存在、絶対的善であるから、それに対するのは、まったくの無、善のまったくの欠如であり、そしてこの両者、すなわち、神と無と

のあいだに被造物は位置する。被造物は、神によって無から創造されたのであって、神によって造られたかぎり、存在をもち、善といわれることができるが、無から造られたかぎり、存在と善を欠いている。それは、存在と善とよばれるすべてのものを欠いてはいないが、しかし、神のように、絶対的な存在と善をもっていない。

「神によって造られたかぎり、存在をもち、善といわれることができる」とは、第3章にある「心は心であることで身体よりも優れている善である。」(3:5:2) が対応する。「無から造られたかぎり、存在と善を欠いている。」とは、被造物である人間は創造する前には存在せず、天地創造の物語で、善悪の知識の木を食べた人間の物語が思い起こされる。

神の絶対的善について「私たちはこの善の中に生き、動き、存在する。」という表現は極めて象徴的である。この善の中に、個人から隣人、人間集団まで存在すると考えるならば、隣人愛を考察する時の一つのモデルと考えられる。もともとこの聖書の言葉は、パウロがギリシャ人に語った時の説教の中にある言葉である<sup>24</sup>。アウグスティヌスは三位一体論の中で、サマリア人など異邦人についていろいろ論じている<sup>25</sup>。善の中に生きる人間の思想は、三位一体論と社会福祉の接点を隣人愛において考察する上で、重要な視点である。

## 5. 結論

本稿では、三位一体論後半の序論にあたる第8巻の序章から第3章を対象に、信仰と真理の形而上学的対比について考察した。第8巻全文のデジタルデータを用いて、すべての段落ごとに論旨を作成した。単語の使用頻度を算出し、段落ごとの前後関係を確認しながらできるだけ客観的に論理の展開を把握することに努めた。この要旨をもとに、論理の流れを詳しく考察した。その結果、序章から第3章に至る論理的な構成は極めて整然としており、信仰の真理から彼の善の思想にいたる思考過程は極めて明瞭となった。

本論では、隣人愛に対する視点を持ちながら、信仰と真理に関する形而上学的な議論が確認された。真理と偉大、心の実体は神の本質と異なるが、善の本質は神の本質と一致すること、心は物的であると同時に善に向かって回心する非物的な面のあること、以上が主な結論である。これらの議論の背景には、人間が善の中で生き、動き、存在するというアウグスティヌス独自の思想があり、この点が隣人愛と密接に関係するように思われた。例えば、善の中で生きる人間を集団まで拡張するならば、善と隣人愛の関係が必然的に現れないだろうか。もし、本稿の議論の延長としてこの点を検討するならば、次のような課題が考えられる。

- 1) 人間集団の心の物的性質と善
- 2) 善の中に生き、動き、存在する人間集団

これらの課題について、本稿で確認された論理構造に従って本質と実体を検討することが可能である。その結果、集団の多様性、集団の葛藤・崩壊・再生などが明らかになるかもしれない。聖書の世界では神とイスラエル民族の歴史的な関係などに対応するものであろう。今後、第8巻第4章以降にある愛と義に関する議論と合わせて検討したい。



## 凡例

- ・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」、引用は省略文書名に続けて章：節を示した。
- ・引用文献の中で、参考文献にあるものは通し番号を〔 〕で示した。
- ・「三位一体論」テキストの引用は（巻：節）で示した。

## 引用文献・注

- 1 アウグスティヌス, 中沢宣夫訳, 三位一体論, 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- 2 形而上学は、英語では「メタフィジックス」(metaphysics)といい、自然の背後や基礎を探る学問。アリストテレスの著作『形而上学』では存在論、神学、普遍学の三つである。普遍学では、因果性、実体、種、元素といった問題を含む。第8巻序章から第3章でなされる対比の一方は三つのペルソナと一つの本質という三位一体の神である。ペルソナは神の実体を意味しており、本稿では必要に応じてペルソナと実体を使い分ける。対比のもう一方は、私たちの世界の真理、真実、偉大、大きさ、物体、心、善といった形而上学的な実体である。特に物体と心は現代の自然科学の実体に見えるが、ここでは形而上学的な実体を意味しており、物体や心の真実という表現などがある。
- 3 〔7〕〔8〕〔9〕〔10〕
- 4 〔4〕 p.41
- 5 〔2〕 p.127
- 6 〔13〕 p.169
- 7 〔13〕 p.188:「隣人への愛が神への愛に帰着するということは、隣人に関わる『愛』が完全に成立している限りにおいて語られうるものであろう。とすれば、逆に、そのことはわれわれにとって他者への愛というものがいかに至難であるかを示しているのだ。」
- 8 〔3〕 p.188-204: 出村和彦“6 キリスト教倫理”
- 9 〔1〕 p.71: 二つの愛とは聖書の次の箇所である。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」(マタ22:37)、『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」(マタ22:39,40) 聖書の他の部分にも同様の記述が複数ある。愛に関する議論は、『キリスト教の教え』第1巻と『三位一体論』第8巻で共通している内容が多い。
- 10 〔5〕 p.258-304
- 11 〔6〕 p.58: 第4章に現代における信仰と理性の関係を論じている。
- 12 Microsoft Access 2016
- 13 用語ごとの厳密な定義は三位一体論テキストには書かれていない。本論では逐一解説しないが、可能な限り統一して用いている。
- 14 〔11〕 p.227: 第7巻第12章に、33歳で受洗する少し前に、存在するものはすべて善であるという境地に達している。
- 15 〔1〕 p.29: 注(1)、アウグスティヌスはドグマから自由な、ゆたかな文献学的、文学的な方法を採用し、種々の、多様で多層な解釈の道を探り、解釈は真理と相関するとある。
- 16 〔9〕 p.102、4. 1子の誕生と聖霊の発出の類比
- 17 〔11〕 p.134
- 18 〔11〕 p.141: マニ教の指導者ファウストゥスに失望して、次第にマニ教徒から離れ去ったことが



書かれている。

- 19 [11] p.211：占星術に失望したことが書かれている。
- 20 [11] p.200-242：プラトン派の書物に大きな影響を受け聖書と詳細に対比する。イエス・キリスト以外、聖書が多く の点でプラトン派の思想と一致していることを見出し、存在するものがすべて善であると考えることにより、それまで悩んでいた悪に実体の無いことを理解する。
- 21 [7] p.34, p.45：第15巻1章には、①動物より優れた人間の魂の特性、②目に見えない神の性質が被造物に現れていること（ロマ1:20）、この二つが三位一体論を理解する基本的な考え方であると記されている。
- 22 [10] p.25：この聖句の引用は三位一体論全体で5ヶ所あり、このような変更は他にも見られる。
- 23 [12] p.282：訳者の服部英次郎氏がアンデルス・ニグレンが論じた『告白』の根本思想を紹介している。それによれば、神における休息が被造物の目標という思想を『告白』第1巻から読むことができるという。Anders Nygren, Augustine und Luther. Berlin1958
- 24 [10] p.25
- 25 [8] p.11

#### 参考文献

- [1] アウグスティヌス, 加藤武訳. キリスト教の教え. オンデマンド版, 東京, 教文館, 2011, 427p. (アウグスティヌス著作集6)
- [2] 金子晴勇. アウグスティヌスの人間学. 東京, 創文社, 1982, 431p.
- [3] 金子晴勇編. アウグスティヌスを学ぶ人のために. 京都, 世界思想社, 1993, 273p.
- [4] 教皇ベネディクト十六世, カトリック中央協議会 司教協議会秘書室研究企画訳. 回勅 神は愛. 東京, カトリック中央協議会, 2006, 94p.
- [5] 教皇ベネディクト十六世. 教父. 東京, カトリック中央協議会, 2009, 398p. (ペテロ文庫)
- [6] 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅, 久保守訳. 信仰と理性. 東京, カトリック中央協議会, 2002, 180p.
- [7] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：研究ノート1”. 浦和論叢. Vol.54, 2016-2, p.33-61 (2016)
- [8] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：研究ノート2”. 浦和論叢. Vol.55, 2016-8, p.1-29 (2016)
- [9] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：研究ノート3”. 浦和論叢. Vol.56, 2017-2, p.97-125 (2017)
- [10] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察：七つの聖句が描く三位一体論”. 浦和論叢. Vol.57, 2017-8, p.21-55 (2017)
- [11] 聖アウグスティヌス, 服部英次郎訳. 告白 (上), 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2012, 329p. (青805-1岩波文庫)
- [12] 聖アウグスティヌス, 服部英次郎訳. 告白 (下), 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2013, 291p. (青805-2岩波文庫)
- [13] 谷隆一郎. アウグスティヌスの哲学. 東京, 創文社, 1994, 429p.

## 図表

表 1：第 8 巻使用単語の頻度

章	節	段	単語	回数	章	節	段	単語	回数	章	節	段	単語	回数
序	1	1	言	8	4	6	1	善	4	7	10	1	愛	8
	1	1	神	7		6	1	神	3		10	2	神	10
	1	1	善	6		6	2	愛	10		10	2	愛	9
	1	1	聖霊	5		6	2	神	7		10	3	愛	12
	1	1	全能	5		6	2	得	6		10	3	神	5
	1	1	三位一体	4		6	2	心	6		10	3	隣人	5
	1	1	ペルソナ	4		6	2	知	6		10	3	律法	4
	1	1	三位一体御自身	3		7	1	表象	3		11	1	神	7
	1	2	三	5		7	1	或	3		11	1	者	6
	1	2	ペルソナ	3		7	2	人間	4	8	12	1	愛	12
	1	2	1 出来	3		7	1	謙虚	3		12	1	神	12
		2	2 真理	6		7	2	知	6		12	1	知	6
		2	2 偉大	6		7	2	マリア	4		12	1	兄弟	3
		2	2 多	6		8	1	三位一体	17		12	2	見	8
		2	2 所有	6		8	1	知	14		12	2	愛	7
		2	2 真実	5		8	1	愛	11		12	2	君	4
		2	2 存在	3		8	1	信	10		12	2	三位一体	4
		2	3 子	10		8	1	何	8		12	3	愛	73
		2	3 父	9		8	1	見	6		12	3	神	32
		2	3 真実	8	6	9	1	愛	4		12	3	兄弟	15
		2	3 聖霊	6		9	1	人間	3		12	3	見	13
		2	3 同	5		9	2	心	13		12	3	人	11
		2	3 共在	5		9	2	知	8		12	3	居	7
		2	3 大	5		9	2	身体	7		12	3	或	6
		2	3 偉大	5		9	2	生	6		12	3	自己	6
		2	3 真理	3		9	2	意識	5		12	3	得	6
		2	3 場合	3		9	3	何	4		12	3	言	6
	2	3	1 大	6		9	3	知	4		12	3	意味表示	5
		3	1 心	6		9	3	心	4	9	13	1	愛	14
		3	1 真実	5		9	4	義人	23		13	1	生	13
		3	1 物体	4		9	4	愛	8		13	1	神	8
		3	2 神	8		9	4	人	6		13	1	形相	7
		3	2 思惟	4		9	5	義人	11		13	1	信	6
		3	2 天体	3		9	5	知	9	10	14	2	愛	16
		3	3 君	7		9	5	何	8		14	3	見出	4
		3	3 光	5		9	5	人	6		14	3	問	4
		3	3 真理	5		9	5	心	6		14	3	求	4
		3	3 出来	3		9	5	自分自身	3					
3	4	1	善	23		9	6	アレクサンドリア	7					
		4	2 善	13		9	6	カルタゴ	6					
		4	3 心	27		9	6	言葉	5					
		4	3 善	15		9	6	シラブル	3					
		4	3 意志	6		9	7	心	17					
		4	3 働	6		9	7	義	15					
	5	1	善	12		9	7	見	12					
		5	1 君	4		9	7	認	10					
		5	2 善	22		9	7	語	9					
		5	2 心	20		9	7	人	8					
		5	2 存在	13		9	7	愛	8					
		5	2 意志	6		9	7	自分自身	7					
						9	7	得	7					
						9	7	直視	6					
						9	7	形相	6					
						9	8	愛	4					
						9	8	形相	4					
						9	8	真理	3					
	9					9	9	愛	9					
						9	9	自分	5					
						9	9	義人	4					
						9	9	人	3					

注：段落ごとに集計、回数が6回以上および回数3回以上でかつ単語の総文字数が段落文字総数の1%を超えるもの計147件を掲載。ただし「私」「彼」は除外。

表2：第8巻構成

章	見出し	節	段	小見出し
序	信仰の真理。	1	1	相互関係的な実体と偉大な本質。
			2	偉大な本質とペルソナの神性の等しさ。
			3	信仰の真理に関する論議の限界。
1	真実と偉大さ。	2	1	創られた真理と造られたものの真理。
			2	より真実なものがより大きい。
			3	真実が等しければ等しく偉大。
2	人間の心の物体的性質。	3	1	心は物体と同じように真理と異なる。
			2	神が何でないかは価値のある知識。
			3	心が見る真理の光を遮る物体的な似姿。
3	善の中に生き、動き、存在する人間。	4	1	すべての善の善である神。
			2	魂の善。
			3	意志を働かせ善き心となる回心。
		5	1	分有された善そのものを観ること。
			2	善の中に生き、動き、存在する人間。
4	知られないものが愛され得るか。	6	1	善の現臨を享受するために神を愛する。
			2	誰が知らないものを愛するであろうか。
		7	1	読んだり聞いたりして物体の表象を作る。
			2	信仰の関心は表象より人物の生涯や業にある。
5	神を知解する類似と比較が問われる。	7	1	信じるとき神の知識によって思念が形成される。
			2	種の・類的な知識によって神の不思議な業を思念する。
		8	1	いかなる類似と比較に基づいて信じるかが問われる。
6	なぜ私たちが使徒を愛するのか。	9	1	私たちは知っていることに基づいて義なる心を愛する。
			2	自身の心に基づいて他人の心を知る。
			3	自身の心に基づいて義人を知る。
			4	義人であろうと欲する人は義人を知っている。
			5	自分自身のもとでのみ義人とは何かを見出す。
			6	想像して語り、想像して他人の言葉を信じる。
			7	義なる心とは何かを見る形相そのものを愛する。
			8	自分が知解する義人の形相と真理に基づいて愛する。
			9	人間は義人か義人であり得るかによって愛する。
7	愛について先ず考究すべきである。	10	1	真実の愛とは真理に固着して正しく生きること。
			2	神を愛する人は必然的に隣人を愛する。
			3	隣人を愛する人は必然的に、愛そのものを愛する。
		11	1	神は愛であり、自分たちのもとに居られる。
8	誰でも兄弟を愛すべきことは知っている。	12	1	彼に兄弟を愛させればこの同じ愛を彼は愛する。
			2	君が愛を見るなら、君は三位一体を見る。
			3	私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛する。
9	なぜパウロの言葉に心が燃えるか。	13	1	義の不可変的な形相に基づいてパウロを愛する。
10	聖書の愛は善の愛である。	14	1	聖書の愛は善の愛である。
			2	愛する人と愛されるものと愛の三つがある。
			3	求めるべき場所を見出したので休息しよう。

引用：筆者作成『三位一体論』第8巻全文デジタルデータベース2018. 5. 30版

## 謝辞

この研究は多くの精神的な障害を持つ方々との交流から始まりました。教会や職場、福祉施設での経験はたいへん貴重なものでした。いつも励まされるホノルル在住の神学の友 Conrad Koji Moriwakeさん、私の自問自答を聴いてくれた私の妻に心から感謝します。

## Summary

The concept of neighbor love drawn from Augustine's Trinity Theory :  
Metaphysical contrast of faith and truth discussed in Volume 8

Shuichiro Kunori

This research is one of a series of studies that considers the point of convergence between Augustine's Trinity Theory and social welfare. His "Trinity Theory" text consists of 15 volumes, and this study discusses the latter part of Volume 8 and beyond. In that part, he develops the unique Trinity Theory based on the relationship between the "lover, what is being loved, and the action of love." After a long discussion, he is convinced that the trinity of "memories, intelligence, and will" is the optimal analogy of the trinity of God. I have great interest in understanding neighbor love that is indispensable for social welfare based on Trinity theory. In order to realize that, I think it is necessary to understand the debate about love of neighbor from the beginning. In this paper, I attempt to accurately grasp the logic from the introduction to chapter 3 of volume 8. In the Trinity theory and the truth of our world, he makes a metaphysical contrast between each essence and entity. The essence of truth and greatness, and entity of heart are different from the essence of God, but he argues that the essence of good matches the essence of God. He understands his own experience of conversion as a work of the mind that tended towards good. Understanding that humans live, move, and exist in good is an important aspect of the concept of love of neighbors.

**Keywords** Augustine, The Trinity, Neighbor Love, Volume 8

(2018年5月17日受領)